

大井 蒼梧（おおい・そうご）

1、プロフィール

明星派の歌人として与謝野晶子らと親交を結び、一時期「明星」十哲と呼ばれた。宗教に傾倒し信仰派歌人とも呼称されるが、後半生は宗教家としての道歩むことになった。

<生没>

1879(明治 12)年 11 月 24 日 ~ 1937(昭和 12)年 12 月 13 日

<代表作>

歌集『法悦』『大井蒼梧詩文集』

小説『細川忠興夫人』

<青森との関わり>

父が青森、母が弘前の人。生後5ヵ月より、明治 27 年早稲田中学へ転ずるまで青森、弘前に住む。

2、作家解説

本名一郎。蒼梧、鶴林、蒼梧郎の号を使用。東京玉川周辺で出生。当時父は宮司をやめ、東京高師在学中であった。生後5ヵ月で母と帰郷。明治 19 年青森師範付属小学校、27 年弘前中学校入学。同年夏上京し早稲田中学校へ転入した。中学時代は徳富蘇峰を読み、漢詩・新体詩をつくり、一方で宗教に心を傾けた。大井家は儒教的空気が強く、反キリスト教的な少年に育っていたが、母は青森聖アンデレ教会の信者となり、やがて伝導師となった人で、この母と東京で初めて讃美歌を聞き教会内部を見た。その後同級生からキリスト教に誘われ、懐疑と入信の間で悩むが、30 年 10 月 17 日受洗した。31 年人生の大疑に逢着、文学・芸術等による解決を図る。32 年「人生は研究である」とし、これを「研究道」と名付け、研究道生活を 43 年まで続けた。

33年東京高師入学、この年「明星」同人となる。34年2月「明星」第11号に鶴林の号で初めて短歌3首が載る。新詩社茶話会に出席、与謝野鉄幹、晶子と親交を結ぶ。

35年東京高師を卒業後、盛岡中学校に赴任、啄木等の「白羊会」に顧問として迎えられた。36年東京府立第三中学校に赴任。この頃より「明星」において注目され始め、鉄幹より「信仰派」と称された。38年頃からは「明星」の編集を担当した。

招聘されて40年に仏教中学校に赴任、42年より「芸備日日新聞」の「芸備歌壇」選者として活躍、44年にはメソジスト教会設立の広島女学院に勤務、メソジスト教会の教職補となる。大正2年越中高岡に牧師として赴任、「高岡新報」記者、「福音新報」編集長、越後村上の教会牧師、6年日本基督教会と絶縁、8年天主教受洗等変転を重ねるが、広島を去ってからの作歌活動にめぼしいものはない。

大正11年長崎の海星中学に勤務、この頃より第二次「明星」に出詠。静岡県立農学校等の勤務を経て昭和7年上京、「冬柏」に出詠、自選歌集の準備を進めていたが、12年に長野での伝道活動の途次発病、12月13日に没した。

3、資料紹介

○『法悦』

図書

1967(昭和42)年8月5日

190mm×130mm

歌集。昭和9年に自選、「法悦」と題して未刊になっていたものを、30年忌をむかえるにあたって、遺族の手によって刊行されたものである。第二次「明星」時代以降の歌が主で、542首収められているが、いずれも宗教的色彩の濃い歌である。